秋月ねじ子……旧姓、諏訪内。地味な腐女子まっしぐらな人生から、結婚を機に派手な腐女子まっしぐらに。永遠のアラサー。料理はようやく人並みに。最近の座右の銘「家宝は腐っても待て」。

秋月豪太郎……世界トップクラスのＩＴ企業の社長で容姿端麗な男だったが、寂しい生い立ちを埋める様に求めた伴侶がねじ子だったから、カネを持ってる人の心はわからない。隠してるつもりだがバレバレの性癖は脚フェチ。秘書は金髪美人。

※　※　※

梅雨を間近に控えた、日曜昼下がりのビッグサイト。
とある即売会の片隅、「お誕生席」に陣取ったねじ子の目の前で、最後の一冊が買い上げられた。
「ありがとうございます」
礼を述べるねじ子の周りで、完売を祝う拍手が湧いた。
「おめでとうございます！」
初対面ではあるが、どこか見知った雰囲気もある参加者たちから口々に誉められ、正直悪い気分ではない。
だがどこか、その表情には晴れぬものがあった。

荷物をまとめると買い物もそこそこに、ねじ子は帰宅の途についた。
「だからぁ、余計なことしなくていいって言ったのよ」

豪太郎のふいの一言に、ねじ子が眉間にしわを寄せる。

いた事をするから。だからあんまり、気にしないで」
落とした両肩に手を置かれ、母親のようになぐさめるねじ子を見て、豪太郎はちょっと気分が晴れた。
「ありがとう。ご飯、作るね」
「よろしくです」
程なくテーブルには隠れた名店の様な料理が並び、二人はゆったりとした気分で日曜を終えた。

それから三ヶ月後。
気のせいかどことなくテンションを下げたプロモーションの影響をものともせず、爆発的人気をキープしたまま、続編は始まった。
「そうか、今日は夏コミだったな」
隣のベッドはからっぽだった。
豪太郎はゆっくりと体を起こすと、枕元の携帯を手に取る。
「いってきます。お留守番よろしくね！」
出がけに送ったであろう、ねじ子のメールが届いていた。
「流れに逆らわず、か。確かに自然体が一番だよなあ」
豪太郎が一人頷いていると、今度は電話がかかってきた。

「ねじ子さん、具合はどう…」
豪太郎がそう言おうとする隙も与えず、まくし立てる妻の声が耳元で響いた。
「あのね、全然足りないの！在庫！私の部屋に段ボール箱あるでしょ？それ全部クルマに積んで持ってきて！早く！あーもうこんなんだったら、たたき起こして最初っから持ってくれば良かった！じゃねー！」
「……」
それだけ言うと、電話は切れた。
パジャマ姿のまま、ねじ子の部屋を訪れると、紙ゴミやペットボトルが散乱する床の上に、段ボール箱がうず高く積まれていた。
「Ｆ４３０じゃ、ちょっと無理だよなあ」
トランクルームのないフェラーリでは、運べそうもない。
レストアしたてのワーゲンバスに荷物を載せて、豪太郎は有明に向かった。
「流れには逆らわず、か……」
日差しに輝く逆三角形の建物を目にしながら、彼は静かにつぶやいた。